

決して人を入れてはならん」北畠安次は子供のことで夢中になつて居りますから、物要りなどはトンと厭いはいたしません、二「少しも早くいたせ伊委細承知いたしました、シテ一刀三禮と申しますると、二「一刀入れては三度づゝ拜す、されば金吾が一刀を入れると、私が經を讀みながら禮をする、精進潔齋に及んで造らへる、夫ゆる出来をいたすまでは決して誰も入つてはならん、諸人出入り留めだ、伊成程尤とも千萬、誠に有難いことで」ソコで直ぐに清淨の地を選んで小屋を造らへる、金吾則村を先に禪師新左衛門も夫へ入つて之からコツ／＼手傳ひを

する、漸やうのことで出来上つた、禪師が、二「イヤ之でどうか地藏が出来上つた、新左どうだへ地藏と見えるか、新左様でございますな、先づ地藏とは見えません、二「さうか、何と見える、新狸の化物：：、二「狸の化物とは酷ひな、マア宜い、之で出来たとして置け、其處で金吾、貴様が北畠へ遠慮なく作料を取つて、都へ歸れ、金有難う存じます、二「遠慮なく充分に貰へ」ソコで金吾が出来いたしました趣むき役人へ届ける、役「イヤ大きに御苦勞であつた、シテ作料は何の位で宜しいな」金吾は一休様の御言葉があるから、金吾、一生懸命造らへました

ので、千兩どうか頂戴いたしたふ存じます、役千兩……」
 チト高いとは思つたが、一休様が日本一の佛師だといふ
 ことゆゑ、是は千兩位の價值はあるだらうと言ひ値の
 通り千兩ズバリと呉れた、金吾は喜こんだの喜こばない
 のではない、其千兩の金を押頂だいて下つて来た、金へ
 エ行て参じました、二「ア、どうした、金首尾能く貰つて
 来ました、二「さうか對手が對手だ十萬兩も貰つたか……」
 「二どういしたまして、千兩頂だきました、二「たつた千兩
 か、モウ些と吹掛けてやれば宜いに、金へエー、たつた
 千兩……」金吾は大喜びで、都へ歸る、之も禪師の御仁

徳の一ツでございます、扱此方は出来上つた地藏尊五尺
 三寸ある、安次の前へ持つて出でました、伊勢守大きに
 喜こび、日本一の佛師が一生懸命で造らへたといふから
 定めし能く出来たらうと見ると這は如何に、酷い地藏で
 加之眼がない、伊「エ、禪師へ伺がふが、二「何だ、伊此の
 地藏には眼がございませんやうで」いはれて一休様が見
 ると驚ろいた成程眼がない、金吾め金の事ばかり思つて
 居て忘れて行つた、けれども少しも騒がず、ニツコリ笑
 つて、二「イヤ是はな、眼といふものは誠に難かしい、大
 切な處だから私に入れさせる心算で態と入れずに参つた、

ドレ〜私が入れてやらう」と平氣なもので、懸て眼を
入れた、夫を一問へ安置して、伊「エ、付きましたは來年
が鶴丸が三回忌に當ります、其時之を納めますゆゑ、夫
までどうか御逗留を願ひたい」新左衛門驚ろいて禪師の
袖を引いたから、二「イヤ私は之から廻り所がある、夫まで
茲にも居られんから又其の時は改ためて來るやうにいた
すから」と茲で新左衛門と一旦此の所を出立をいたされ
ました。

第二十四席

念佛の詫證文

扱之から伊勢の兩宮へ參詣をいたし、那れから諸方を御
見物になつて、桑名から宮へ渡つて、鳴海池鯉鮒、赤阪、
段々東へ下つて興津那れから又道を替へて甲州の身延へ
來た、身延山には大きな山門がある、其前の立札に

念佛輩不可入

と書いてある、禪師何と思つたか大きな聲で、
「南無阿彌陀佛〜」念佛を唱へると山番が聞き付けて飛
出し、
「コレ〜貴様は何だ、念佛の輩入るべからずと
書いてある、之が目に付かんか、二「ハア悪いか、
〇善いにも悪いにも念佛を唱えてはならん、
三「さうか、夫は大

きに悪かつた、勘辨して呉れ、〇勘辨しろといふなら許してやるが、以來はならんぞ、何處だと思ふ、身延へ来て念佛などを唱へて……氣を付けろ」といつて其男は元の所へ入つて了つた、スルと又一休様が、二南無阿彌陀佛く」と始めた、山番は怒るまいことか、〇コレ又やり始めたな、サア勘辨ならん、どうするか見ろ」と突然胸倉を取つて殴り兼ねないから、二イヤ私が悪い、詫まるから勘辨して呉れ、〇イヤ勘辨ならん、嘲弄面に態と大きな聲で呶鳴りやアがつて、二詫書を出すから勘辨して呉れ、〇ナニ詫書を……宜しそんなら勘辨してやる、サ

ア書け、二今書く」矢立の筆を執つてサラ〜と書いて二之で許して呉れ、二よし〜以來氣を付けろ」山番は右の詫書を持つて身延のお住持の處へやつて来て、〇エ、申上げます、何何だ、〇何處の坊主か知りませんが、山門の前で大きな聲で念佛を唱へました、咎めました處が、どうか勘辨をして呉れろと詫書を書きました、是を御覽下さいまし」と詫書を持つて来て住持に賞められやうと思ふから、鼻高々と出した身延の住持が見ると
詫入申す一札の事
何ほどの、無法なことがあるとしても身延へ参る助けに

まへ、佛徳にたいし有難やく

謹 白 宗 俊

と書いてある、僧コレ、〇へエ、何だつて此んなもの
を取つて来た、〇詫書で、僧馬鹿をいへ、之は詫書では
ない、此の中に南無阿彌陀佛と書いてあるではないか、
〇へエー、何處に、僧此の頭字を讀んで見ろ、南無阿彌
陀佛とある、なにほどの、無法などが、あるとても、身
延へ參る、たすけ給へ、佛徳に對し有難やく、詰り、
南無阿彌陀佛が有難いといふのだ、〇へエー、成程：
僧成程ではない、此んなものが何の役に立つ、宗俊、宗

俊と申せば大徳寺の一休禪師に違いないが、どんな御僧
だ、〇斯ういふ坊さんで、僧夫は大變だ、一休禪師
に違いない、お留め申せば宜つた」と跡で住持が残念
がつて、此の書き物は身延の寶藏へ後に納めました。

第二十四席 犬の法然と日蓮

禪師は山を下ると、身延の町を南無阿彌陀佛くと念佛
を唱えてお出でになる、此の界限は皆な法華ばかりだか
ら、門並宿屋はあるが泊人がない、新左衛門が、新どう
か一晚泊めて貰ひたい、〇どうもお氣の毒様で、手前共

は皆な塞がつて居ります」と何處の家でも断はつて了ふ、
新左衛門が、漸どうも禪師困るぢやアございませんか、
貴那が念佛を唱へるので何處でも泊めて呉れません、郷
に入つては郷に従がへ、題目でも唱えて下されば宜いに
「イヤ構はん、泊めて呉れなければ野宿をするだけだ、
新野宿を……夫だけはどうか御免を蒙むりたいもので、
「ナニ仔細ない、南無阿彌陀佛、漸どうも往けませ
んな」町外れへ來ると、亭モシ、御出家、お見受申せ
ば宿に外れて御難儀のやうだ、私共へお泊め申すから此
方へ入らつしやい、「ア、さうか、夫は忝じけない、何

といふのだ、亭武藏屋と申します、
念佛宗の者は何處でも泊めない、貴様の處は愚僧を泊め
て呉れるが、何宗だ、亭私は浄土で、此の町の者が改宗
をしろくと申しますが先祖代々親達が信仰をして來た
其の宗旨を替へるといふのは誠に心に叶ひませんから、
誰が何といつても改宗は致しません、夫が爲めに近所の
奴が私を退け者にして、口を利く奴もない、癩に障るが
どうも仕方がございません、決して御心配なくお泊んな
さるよう、
「さうか、では厄介にならう」新左衛門は漸
やう安心をした、
「だが御出家、毎日癩に障ることがあ

る、二「何だ、〇私共の犬が此の近所の犬と噛合ひをする、さうすると先方の飼主が出て来て家の犬を殴る、癩だから此方でも殴らうとすると、先方の犬の首ツ玉に法然と書いてある、乃公ン所の犬は法然といふ名だ、打てるなら打つて見ると斯ういふ、成程此奴はどうも打てないから、家の奴が噛倒されるのを黙つて見て居る、二「ウム、さうか、夫では何だ斯うするが宜い、貴様の家の犬へ日蓮といふ名を付ける、近所の奴が撲らうとしたら、乃公ン所の犬は日蓮といふ名だ、打てるなら打つて見ると斯ういへば先方も手出しが出来まい、〇成程、是は面白い

ぢやアさういふ事にいたしましたしやう、どうか一ツ札をお書きなすつて、二「よし〜板を持って来い」馳て木の札へ日蓮と書いて犬の首ツ玉へ縛り付け、其晩は其處へお泊りになつた翌る朝、表が大層騒々しい、相變らず犬の喧嘩だ、〇「サア打てるなら打つて見ろ、乃公の家の犬は日蓮と名を變へた、憚りながら貴様達には手が付けられぬへ」と武藏屋が威張つて居る、其處へ禪師が出て来て二「コレ〜静かにしろ〜動ともすると些細な事を角目立つていふが、四海は皆兄弟、仲よく睦まじく今日を暮さなければならんもの、南無妙法蓮華經の題目宗、南無

阿彌陀佛の念佛宗、其の宗旨の違ふ處から、朝晩顔を見合つても知らん顔をして居るといふのは大きに心得違ひ、斯ういふ事が度重なる終ひには公事沙汰になる、さういたすと住持がどの位迷惑をするか知れん、南無阿彌陀佛と南無妙法蓮華經との南無を取つて見る、四字と五字になる、宜いか、南無をぬき四字と五字との争ひがくじとなる一字のことでじう、迷惑……どうだ分つたか、近所の宿屋の主人が、〇成程、此の御出家様の仰しやるのは尤もだ、夫はどうも私共が心得違ひ、以來仲よく暮さう」といふ茲で一同の者が打解けましたから、禪師

に於ては殊の外お喜びになつて、茲を立つて那れから越前の永平寺へお乗り込みになつて、當時名高い禪教といふ名僧、此者へ對面をして、一問答をなさんといふ處が生憎禪教は能登へ行つて留守だ、仕方がないから禪師は一先づ都の大徳寺へお乗り込みになつた、スルと此の禪教が一休禪師と一寸した事から大問答をいたすといふ、名代の塔婆問答のお話しになります。

第二十六席 塔婆問答

茲に永平寺の寺中に經藏院といふ寺がある、此の檀家に

和田村の七郎兵衛といふ百姓がございます、伴を七之助といつて大層親孝行、處が女親は早く亡なつて、只今は七郎兵衛といふ親父を大事に養なつて居る、之がボツクリ病死をした、サア七之助が別れを惜むから、死骸の埋葬をしない、佛壇の前へ親父の死骸を横にして置いて、さうして枕許へ座り込んで念佛を唱ひ、何にもしない、宛然氣が狂つたやうな工合、近所の者が驚ろくまい事か、どうも困つたことがあるものだ、幾ら意見をして聞かない、菩提所の經藏院へ来て住持へ之をいふと、住持が七之助の家へ来て、住持七之助、お前が斯うやつて七郎

兵衛の死骸を此んな事をして置くとは却つて佛へ對して悪い、お前の親父は死んで此死骸はモウ抜け殻だ、宜いか、親父の魂といふものは、此の位牌へ乗り移つて了つた四十九日の間は此の位牌へ移つて居る、だから親父の死骸は早々土に埋めて、さうして此位牌を拜んだが宜い、宜いか、段々死骸は腐る、臭氣が甚はだしく近所の者も甚はだ迷惑をする、モウ此親父の身體には魂はない、だから亡骸といふ位なるものだ、早く死骸は埋めろ、セハアさうでございますか、夫ぢやアア墓場へ持つて行つて埋めませう」と親父の死骸は埋葬をして、跡は位牌の

前へ座つてポク／＼木魚を叩き念佛三昧、四十九日が経つて了つて經藏院へやつて来て、セ「さて旦那様、四十九日の間は親父の魂ひは位牌へ移つて居ると言ひなすつたが、モウ是四十九日も経つて、之から私の親父は何處へ行きます」サア經藏院の住持が弱つて了つた、禪極樂へ行つた、セ「ハテ極樂といふと何處でがす、住極樂といふ處だ、セ「エー、其處へ行く道を教えて貰ひてえ……」經藏院の手においなからソコで之を禪教へ告げると、禪此方へ通せ」早速禪教の許へ連れて来た、セ「どうか經藏院の旦那様が私の親父は極樂へ行つたといひますから、其

の極樂の道を教えて貰いたい、私もハア親父の處へ往かねばならねへから……、禪教が諭してやらうとは思つたが、先達て一休禪師が来たといふこと、會すに了つたが、何の位ゐの器量だか一ツ試してやらうと斯く考かへたから、塔婆を一本七之助へ渡し、禪お前は之を持つて京都の大徳寺へ行つて一休といふ人にあつて聞きなさい、此の人は極樂の道を能く知つて居なさる、セ「ハアさうでございませうか、有難う存じます」之から奴さん塔婆を持つて越前から京都の紫野大徳寺へ来て、セ「お頼ふ申します」黙齋が出て見ると朴訥な百姓、セ「私は越前から参やした、

永平寺の禪教様から申付けた、どうか一休様にお目に掛
りたうございます、黙何の用があつて参つた、六ハ、
私の親父は此間亡なつて、菩提所の旦那に聞いたら極樂
へ行つたといふ、其の極樂の道を禪教様に聞いたら、大
徳寺の一休様が知つてござるから行つて聞いて来いとい
ふ、此んな塔婆を一本持たして遣した、どうかマア私の
親父の行つた極樂といふ處へ私も行きたいから道を教え
て貰ひてえと思つて来た、どうか宜しく取次いで呉んな
厄介な奴が飛込んで来た、黙齋は驚ろいて、黙マア〜
待つて呉れ」之を禪師へ告げると、ニア、さうか、何し

ろ遠方から来たので腹が減つて居るだらう、充分に飯を
食はして本堂へ通し斯う〜いたせ、黙畏こまりました
：サアお前此方へ来てお飯を食べな、七へエ夫は御馳
走さまで」飯が済むと黙此方へ来なさい」と本堂へ通す
と、スツかり閉切つたから中は眞暗、御本尊の前に百目
蠟燭が二本點つて居る、其處へ三衣を纏ひ拂子を持つて
徐かにお立出になり、椅子へ腰を下して二其方が和田村
の七之助といふか、七ハ、私に七之助でございます、ど
うか親父の行つた極樂の道を教えて貰ひたい、ニア、さ
うか、夫では私が此の椅子に居るのが分るか、七分るも

分らねへもねへ、燈火があるから能く分ります、二「さうか」プツと吹消して、二「どうだ一休の居るのが分るか、七馬鹿なこといはねへもんだ、燈火を消して見へるものでねへ、二其處だ七何處だね、二燈火の消えて何處に行くやらむ暗きが元の住居なりけり、分つたか、七些とも分らねへ、二焼けば灰埋めば土となるものを何ぞ残りか罪となるらん、どうだ、二何だか分らねへ、どうか親父の居る極樂へやつて貰いてえ」一休様も驚ろいた、此んな分らん奴は仕方がない、二茲へ持つて来た塔婆を出せ」と聽て塔婆を眞黒に塗つて了つた、二之を持つて永平寺へ

行つて禪教に教へて貰へ、七へエ、何のことだ馬鹿しい、此んなことなら都へ来るには及ばない」と腹を立てつて又塔婆を持つて越前へ歸つて来て、七へエ斯ういふ事で、何だか歌を詠みましたが、忘れると往かねへから書いて貰つて来ました」禪教が見ると感心をした、禪成程天晴れな人だ、併し何で塔婆を眞黒に塗つて遣したか分らない、扱七之助や、お前の親父はモウ疾くに死んで冥途といふ處へ行つて、お前が幾ら會ひたいといつても行かれるものでない、之から先の孝行は、お前が生懸命働らいて、家を興し身を立て、子供を澤山拵らへ

て子々孫々繁昌をする、之が孝行だ、仕事もしないでお前が斯うやつて居ると却つて佛は草葉の蔭で歎くから不孝になる、何より家業を勵むやう」段々と意見をしたら、茲で漸やう愚鈍な七之助も分りまして、七有難う存じます、分りました、以來は一生懸命に働らきます」とソコで遂々此の七之助は一生懸命稼業を勵んで、後に大層な大百姓になりました、是は後のことで、扱て禪教が、どうも塔婆を真黒に塗て遣したといふのは、一圓合點が往かん、之から一ツ大徳寺へ行つて問答をしやう、だが問答に勝てば宜し、負けるやうでは再び永平寺へ立歸ら

んといふ、一山の僧侶に別れを告げて、禪教は都へ参り、大徳寺の眞珠庵へ来て是々と申入れたから一休禪師早速之へといつて本堂へお通しになり、禪教椅子に掛つて扣えました、時に一休禪師が其處へ立出で、茲に始めての御對面、一ト通の挨拶が濟んだ時に禪教が、禪、一説申す」と問を掛けた、一休様が、二説破」とお答へになつた時に禪教が、禪明るくも行かる、道を墨で塗り死出の旅路は如何行くらん」一休が答へて、二明るくも暗くも行くが佛なり死出の旅路に夜晝はなし」スルと禪教が、禪明るくも暗くも行くが佛なり元の白木で何故置き

はせぬ」禪師お笑ひなすつて、「二元の白木で置くなれば御身も我も口過は出来ん」と仰しやつた、禪教はアツといつて驚ろいて、成程一休禪師は當代の名僧、恐れ入つたと其儘本堂を飛出して逸散に逃げて了つた、禪師も驚ろいて、「黙齋く、黙へエ、お召しになりましたか、二禪教が逃げ出した、留めろ」と仰しやつたが、モウ何處へ行つたか行衛が知れない、「ア、困つたものだ、扱は禪教は魔道へ落ちたな」と仰せられました、後年太閤秀吉が美濃攻めの時に美濃の山中で此の禪教に會つたといふ話しがございしますが、併し是は年限も大分過ぎまし

ての事だから如何でございしますか其邊は分りません。

第二十七席 地藏の開眼

さて應永の廿四年となり、鶴丸三回忌、三月廿四日法養を執行なひまするに付て、地藏菩薩の開眼、一休禪師が蜷川新左衛門を連れて再び伊勢へお出でに相成りました、三日前から火の用心、商賣止めといふ、領主の勢はひでございしますから、随分酷な觸もする、禪師が之を聞いて、夫は以ての外のことだ、地藏の開眼、又鶴丸の後世菩提を弔らふに、人民の業を休ませて難儀を掛けると

いふは功德にならん、早々觸直せ」ソコで領主から當日は業を休むに及ばん、通り道だけを神妙にするやうといふこと、愈よ當日になると、活佛といはれる一休禪師の開眼でございいますから、其の血縁に預からずと近郷近在から老若男女、實にどうも黒山の如く押出しまする、されば諸商人も大分出まして一方ならん雑踏、處が一休禪師がトンとお繰り出しがございませぬ、といふのは早く式を濟して了ふと、露店の商人が左程儲けがない、成べく是は手間取つて小商人に錢儲けをさせてやらうといふ、禪師は斯ういふ思召しで、態と其の蜷川新左衛門と話し

をして居て時刻を移しました、伊勢守からは、充分用意が整のえましたから速やかに御出座を願ひたいと、屢々使ひが参りますが一向平氣なもので、彼是半日ばかりといふもの時刻を移し、モウ大體宜らうといふので禪師御出發になる、お先供は中原源左衛門蔭治、其跡へ朱の編代の輿物、お駕籠脇は蜷川新左衛門、續いて北島伊勢守、山本典膳、實にどうも大層な行列でございいます、〇エ、下に「と制止の聲、往來の者は一休様を見やうといふので押合へし合ひ大變な騒ぎ、甲押しちや往けぬくさう押すと館が出るぞ……アイタ、……、誰だ押のは、

と誰だつて仕様がねへ跡から押すんだ、アイタ、、、
押すなく、押しや往けねへ、さう押したつて見えるも
のか、一休様は駕籠ン中だ：：」嘸鳴つて居るのが輿物
の中の一休様のお耳へ入つたから、ニコレ、駕籠を止
めろ、鶴の一聲、ピタリと駕籠が止まる、何を思つ
たか引戸を開けてお立出でになると、突然身を跳らして
駕籠の家根へ飛上つた、ニサア担げ：：宜いから担
げ：：どうだ之なら一休の顔が見えるだらう」北島の家
來は呆氣に取られて居る、ニどーだ一休といふ坊主は此
んな面だ、私が一休だ、一休だ、一休だ、一休だ、一休だ、
駕籠の屋根で踊り

を踊るから駕籠昇こそ宜い面の皮だ、應て地藏堂へお着
になると、本堂は八間四面、四方に卍字の紋を現はした
幔幕を張り、綾羅の旗、羅綾の天蓋、百味の飲食、名香
は霞の如く、實に極樂浄土は斯くやあらんと思はれます
ばかり、諸人思はず南無阿彌陀佛と手を合せ、心も自づ
と正直になりますやう、中原源左衛門蔭治、山本典膳
蔭虎といふ兩家老が夫へ進んで一休禪師に開眼を願ひた
いといふと、此の地藏院の住職が大仙和尚、之が先づお
經を上げる、一休様が添經といふので共に読み上げまし
た、扱お經が濟むと愈よ禪師開眼、一同の者は如何なる

尊とひ、ことを仰せられるか、當時天下に名の高い一休大
禪師、嚙有難いことを仰しやるだらうと、耳を澄して窺
がつて居る、禪師拂子を取つてズイと前へお進みになり、
地藏菩薩を信度見て、二汝元來妙見山にありし梅檀、今
日縁あつて地藏となり、一休大和尚に開眼せられ、本朝
の靈となる、仕合せ者と心得よ、地藏ニツコリ、喝」持
つた拂子で地藏の頭をコツリと打つた、二釋迦は過ぎ彌
勒は未だ世に出でず斯る浮世にめあかし地藏」と仰せら
れた、二是で宜しい」拂子を持つて禪師が跡へ退らうと
するから兩家老が、〇エ、禪師へ願ひます、二何だ…、

家誠に恐れ入りますが、今一度開眼を願ひたふ存じます
が如何でございませうか」と餘まり呆氣ないから聞いた
二ア、さうか、よし」物に頓着のない一休様の事だ
から、又拂子を持つて、二唐衣又唐衣」返す」も唐
衣かな…之でよろしい」何だか些とも分らない、どう
も驚ろいた開眼の仕方だがマア併し禪師がなすつたのだ、
さう度々仕直しを願ふ譯にも往かないから、先づ宜らう
と、跡は鶴丸の三回忌を懇ごろに執行なひまして、禪師
は愈よ御出立といふ、ソコで北畠から夥だしく禮金を差
出しましたが禪師は一物も手をお付け遊ばされん、

惜しからず物蓄はへず慾しからず

着のみ着のまゝ之が極樂

「私は少しも要らんから、之は下々の貧窮人へ恵んでやんなさい、鶴丸の菩提にも相成るから」と瓢然として都へお歸りになりましたが、其後此の關の地藏は勅封になりました。

ソコで後の者が石の地藏を拵らへて、丁度夫が出來した時に一休禪師がお通り掛りになつた、是幸はひと、どうか開眼を願ひたいと願ふと、一休様が宜しくと突然地藏の頭から小便を引掛けて是で宜しいと仰やつて行つて

お終ひなすつた、サア頼んだ人が腹を立つて、如何に大徳寺の一休様だからといつて、尊とひ地藏様へ小便なんぞを引掛けるなどいふ法はない、飛んだ心得違ひの坊主だ早く掃除をするが宜いと夫からドン／＼水を掛け綺麗に地藏を掃除した、スルと此の掃除をした者が其晩、大徳寺の生佛、天下の名僧一休和尚が開眼をして下すつた、夫を洗つたり何かするといふのは以ての外のことだ、モウ一度一休禪師に開眼して、貰ひたいと皆一同に熱言をいふ、ソコで一同の者が驚ろいた、夫ではモウ一度禪師へお詫びをして開眼をし直して貰ひたいと跡追駈けて

四日市で此の由を申上げると、禪師がよし〜然らば是を遣はす持つて參つて地藏の首へ掛ける、さうすれば宜いと畚禪を取つてお渡しなすつた、能く亂暴なことをなさる、是も如何とは思つたが、禪師の爲さることであるから、其畚禪を持つて來て地藏様の首へ掛けると、熱を病んだものが段々癒つて其後は何事もなかつたといふことでございしますが是は當にはなりません、尤とも禪師が此の地藏へ開眼をなすつたのは

花は根土はもとへかへる故郷

と仰しやつて自分の片袖を地藏の衿へ巻付けた、地藏と

いふものは元々土を祀つたもの、萬物は土より生ず、所謂天は父地は母でございまして、地は柔和なもの、けれども柔らかばかりでは往けないといふ處から閻魔といふものを造つた、其の地を祀つた地藏であるから禪師が、『花は根土は元へ歸るふるさと』と詠んだといふことでございします、何にせい此の關の地藏といへば有名なものでございます、四國阿波國の立居地藏、是は惡人が參詣をすると夢中になつて倒れて了ふといふ靈驗著がでございます、又北國街道梁ヶ瀬から四里八丁紀の本の地藏、夫に關の地藏、是れを日本の三地藏と申します。

第二十八席 蛸の茶屋

扱禪師は大徳寺へお歸りになつて、蜷川新左衛門と毎日四方八方の話し、或一日の事で、〇「お頼ふ申しますく」黙齋といふ坊主が出て見ると一人の武士、武へエ手前は二階堂信濃守家來本多周防と申します、此度主人病死いたしましたに就き、生前の御懇意、又豫てのお約束でもござれば、禪師に引導を願ひたく、お願ひに罷り出でました、黙「一寸お待ち下さい」奥へ來て禪師へ申上げると「イヤ二階堂が遂々參つたか、夫は氣の毒な、今直ぐに

行くといひなさい、黙畏こまりました、只今禪師へ申入れました處、跡より直ぐお出でとのこと、武「ア、左様で、どうか何分宜しく」と喜こんで武士は歸る、二「さて新左衛門、私は是から二階堂の處へ行くが、どうだお前同道しないか、新畏こまりました、お供をいたします」ソコでお立出でになつた、尤とも先方が大名、蜷川新左衛門の考がへではお駕籠へでも召して本格でお出掛けになるかと思ひの外、麻の法衣に藁草履、新禪師、二「何だ、新餘まり夫では無雜作ではございませんか、切めては衣服だけでも……、二「イヤそんな心配には及ばん、是で澤山

だ、サア行かふく」新左衛門とたつた二人、やつて参りましたのは蝟茶屋といふ有名の茶屋、其前を通り掛ると、見てから旨さうな蝟がブラ下つて居る。「新左衛門、漸へエ、二どうだ那のお仲間を見ろ、漸へエ、二お仲間を見ろよ、漸へエ、何で、二何ではない、那所にブラ下つて居る、新成程、蝟で、二さうだ出家の方ではお仲間といふ、どうだ友喰をしやうかな、漸恐れ入りました、併し是から二階堂の屋敷へ参るに酒氣を帯びては……」
「ナニ構ふものか、却つて佛が喜こぶ……」
「ナニ佛が喜こぶものか、二許せよ、亭入つしやいまし、二其の蝟で

一ぱい呉れ、亭へエ畏こまりました、誠に好いお天氣でどうぞお掛けなすつて、二新左、お前は何が宜い、私は酢にして貰ふが……さうか、ぢやア亭主酢にして五六人前呉れ、亭畏こまりました」其内に酒が来る、二「ア、旨いな、どうだ新左、酢蝟で一ぱいやるのは何より旨い：オヤモウ無なつた、亭主、酒のお代りだ、亭へエ畏こまりました」
「グビくやりながら禪師がヒヨイと傍はらを見ると白張の衝立がある、二新左衛門、漸ハツ、二此の衝立は眞白だな、新左様で、二どうも白張の衝立といふのは訝しい……亭主、亭へエ、二是は衝立だな、亭左様

で、「眞白だが、どうしたのだ、亭どうも仕様がござい
ません、家の餓鬼共が悪戯で、指を舐ちやア穴を明ける
ので見ともなくつて飾つても置けませんから、夜業にス
ツカリ貼替へました、けれども眞白でも訝しうございま
すからな、何か斯う繪の先生に頼みたいと思ひますが、
どうも此んな物を汚して呉れる人が見當りません、ニア
よさうか、道理で白張りは訝しいと思つた、どうだ乃公
が書いてやらうか、亭へエどうも有難う存じます、どう
か願いたいもので、「よし」墨を持つて来い」筆と墨
を取寄せて、「宜いか、乃公が目出度いものを書いてや

る」筆を執つて衝立の真中へ輪を一つ書いた、新左衛門
が何を書くかと見て居ると、其の輪の下へポツ／＼點を
幾個も打つた、「どうだ新左衛門、是が分るか、新へエ
二何に見える、新左様、月に叢雲とも見えず、日輪とし
ては出来が悪し……、二馬鹿をいへ、是は蜘蛛だ、新へ
／＼、二妙な笑ひやうをするな、是へ乃公が今讚をする、
自畫讚だ」とサラ／＼と書いたのが

此度は急ぐとすれど長袖の

蝟の入道みちの遅さよ

其儘筆を投つて、ニア、快い心持だ、どうだ新左、能く

出来たらう、蜘蛛にも足が八本、蝮にも足が八本、世の中は面白い、蜘蛛にも足が八本、蝮にも足が八本だ……」
 手を叩きながら踊りを踊つて表へ飛出して了つた、蝮屋の亭主は驚ろいた、亭ヤツ那の坊主食ひ逃げだ、モシモシ勘定を拂つて行つて下さい」追駈けやうとするから新左衛門が、蕪ア、コレ」勘定は私が拂ふ、幾らだ……さうか、此處へ差置くぞ、亭有難く存じます、お大事に」
 新左衛門は錢を拂て表へ出る、此方は一休様、ニア、コレヤ、蜘蛛にも足が八本だ、蝮にも足が八本だ……」
 踊りを踊つて二階堂の門内へ入らうとするから、門番が

驚ろいた、門「コレ」何だ貴様は出る、二イヤ捨置け、苦しうない、門馬鹿をいへ、貴様の方が苦くなくつても此方が苦しい出る、二イヤ構はん、門構はんではない……出るといふに……」ドンと突いたから堪らない、酔て居る處へ突かれたからヨロ」と蹠跟て溝の中へポチャリ、門態を見ろ」門番は中へ入る、處へ駈けて参りました蝮川新左衛門此の體を見ると驚ろいて蕪是はどうも飛んだことで、何處か痛み所はございませんか」漸やう溝から引出して大手を振つて又門内へ入らんとする、門番が見と、蝮川新左衛門は一ト頃町奉行を

勤めましたから顔をチャンと見知て居る、門是は蜷川様で、新如何にも新左衛門だ、門其の狂人坊主は何で、新黙れ、狂人坊主とは何だ、此のお方は大徳寺の休様、門エ、ツ、其のお方が：：夫はどうも飛んだ御無禮をいたし、何とも相済みません、全く知らんことで、幾重にも御勘辨を：：、二よし、何も詫まる處はない、ア、快い心持ちに酔つた」と又手を叩いて踊りながらお立關から座敷へやつて来た、家老の加納將監苦しい顔をして、何ぼ一休様だからといつて、引導を渡しに来るにペロ／＼に酔て来とは、不都合だとは思つたが仕方が

ない、將是は、禪師には能くこそ在せられました、今日は御苦勞に存じます」と先に立つて案内をした、信濃守の居間へ来て見ると、白綸子の三枚重ねの布團の上へ縮緬の掛け夜具、樺色縮緬の枕に横になつて居る、實にどうも奢り増長した振舞でございます、二どうか引導を願ひます、ニア、宜しく」と一休様がお座りになつた時に餘まり腹を揉んだので心持ちが悪くなつて胞がムカ付くと尾籠のお話してございますが、信濃が寝て居る結構な夜具へゲロ／＼と吐いた、サア加納將監ムツとして、將エ、禪師、斯様な席へ御酒を召上つて在しや

るのみならず、尾籠至極な振舞、其の意を得ません」是は怒りさうなことで、禪師是を聞いて、「アツハ、、、、イヤどうも酔つたので腹を揉んだからイヤどうも飛んだ事をした、よし／＼之から引導をいたすから、信濃の伴を呼べ」ソコで伴龜丸がやつて来て御挨拶をいたしました、ニ「サア乃公が引導を渡してやる、一同の者謹しんで承はれ」佛へ渡すのぢやアない生きて居る我々へ渡すやうなものだ、一休禪師法衣の袖を搔合せると二階堂信濃守の死骸を見て、「ニ千手觀音蝸手多、斬懸袖酢以如何、佐州一味天然別、他禁戒任老釋迦」と仰せられた、

「之で宜しい、安養淨土へ浮む」といふと其儘瓢然とお歸りになつて了つた、實に是は戒しめの引導で意味深長でございませす、扱一休禪師が此處に泉州堺へお出でになつて地獄太夫と問答に及ぶといふ有名のお話し。

第二十九席 鐘 馱 の 軸

扱讀續きましたした一休禪師のお話し、まだ中々末が永ふございまして、蜷川新左衛門の妻の辰子を得道させ、野晒悟助の話し、奥州信夫へお出でになつた道の記などといふやうなお話しもございませすが、是は諄くなりますから

大略いたします、一年泉州の堺へお出でになりました定齋庵といふへ暫らく御滞在になつて、此の界隈の老若貴賤、禪師のお徳を慕つて日々御草庵へ集まります、忽ち一休禪師のお名前は此邊に響き渡りました、スルト茲に堺の町人で伊豆屋八九郎といふ金貸がある、どうも此の商賣の方には善い人が少ないやうで、此の伊豆屋も貪慾邪慳だ、高田源易といふ醫者の許へ参りまして、八時に源易さん、金儲けがあるが、どうだ半口乗らないか、いふと眼の寄る處へ珠の譬で、運ナニ金儲け、結構だ、半口といはずに十口も乗らう、何だへ夫は、八他でもない

が定齋庵に一休様が来て居る、運成程、八處でお前が繪を描くのが上手だ、醫者は空ツ下手だが……、運オイ、伊豆屋さん、跡が悪いや、八だがさ、本當なら仕方があるまい、運マア何でも宜い、夫がどうした、八其處だ、運何處だ、八見ちやア往けねへ、實は私の處に鐘馗の軸がある、夫がどうも誠に能く出来て居る、夫をお前一つソツクリ寫して貰いたいものだ、其奴を禪師の處に持つて行つて讚をして貰ふ、さうすると私の處の鐘馗の軸が百兩と積つて、禪師に讚をして貰つたのが百兩、兩方で二百兩になる、お前に五十兩やる、どうだへ一ツや

らないか、源、イヤそんな事なら譯はない、やらう」ソコ
で此の源易が鐘馗を寫すと、何方が本者だか分らないや
うに能く出来た、ハア、是で宜い、ぢやア讚をして貰ふ
から一緒にお出で」源易の書いた奴を持つて定齋庵へ來
て、ハ「お願い申します」相變らず黙齋といふ坊さんが、
黙「ハイお出で、ハエ、禪師様は在つしやいますか、黙お
在でだが、何の用で來なすつた、ハ私は伊豆屋八九郎と
申します、是は高田源易、黙ウム、ハ此の人が其少々金
子差支えの事があつて、此の軸を私が十兩で質に取りま
した、處が期限になつても受戻す事が出来ませんで流れ

て了ふ、けれども只此の軸ばかりでは、幾らにもなりま
せんので、私が全然損をしなければなりません、夫では
何分にも難澁をいたします、就きまして願ひまするのは、
之へ何でも構ひません、禪師様が讚をして下さいます
ると、之が十兩になります、私も損をせずに濟み、此の
人も私へ損を掛けたうないから共々禪師へ願ひませうと
斯ういふ事で、打連れて出ましてございますが、一ツ讚
を願はれますまいか、黙ア、さうか一寸お待ち」黙齋も
世の中には慾張つた奴があればあるものだとは思つたが
禪師へ右の由を申入れると、「さうか兎に角軸を見せな

さい」黙齋が持つて来たのを見ると一目して眞偽が分る、
 どうして是はまだ書立ての畫だ、天下の名人などは眞
 赤な嘘、二「よし、然らば讚をしてやると申せ」周庵
 といふお弟子がやつて参りました、周八九郎といふはお
 前か、ハ、ヘエ、周讚をして呉れといふのか、ハ、ハイ左様
 でございます、周宜しく讚をしてやる、待つて居なさ
 い、ハ、ヘイ有難う存じます」シテやつたりと高田源易伊
 豆屋八九郎顔を見合つてペロリと舌を出し、先づ懐手を
 して居て二百兩儲かると喜こんで居る、此方は周庵、禪
 師のいふ通り右の軸へサラ〜と書いて持つて来た、周サ

ア之で宜しい、ハ有難う存じます、どういふ物をお認
 め下さいましたか、恐れ入りましたが一寸拜見をいたし
 ます」披いて見ると

にせさんと四の五の言ふは六かしき

しちや八九郎十まいにうれ

何だかサツパリ分らない、ハ、エ、少々伺がひます、周何
 だ、ハ、エ、にせさんと四の五のいふは六かしきしちや八
 九郎十まいにうれ、周さうだ、ハ、ヘエ失禮ながら貴
 僧が一休様で在つしやいますか、周私は一休ではない、
 弟子の周庵といふものだ、ハ、ヘエ、禪師様のお名前が之

にございませんが、どうも其の一体といふお名前がござ
いませんと、どうもチト手前方で不都合でございますが、
一ツお名前を之へお書入れを願ひます、周イヤ別に書な
くつてもチャンと夫に入つて居る、ハへエー、どうも私
共には見えませんやうでございますが……、周見えんこ
とはあるまい、能う考がへて見ろ、二三四五六七八九十
とあるが、一があるまい、ハ成程、周一といふ字が休ん
で居る、で一体だ、ハへ、エー、ナール程、周夫で宜か
らう、歸んなさい」伊豆屋八九郎高田源易は顔を見合つ
て驚ろいた、偽せの軸を持つて來たから忽ち禪師に見破

られたから御自分が筆を取らない、弟子の周庵に書して、
にせさんと、偽だと言はれた、シヨで兩人は驚ろいて逃
け歸つたが、忽ち此の評判が高うなりました。

第三十席 地獄太夫

スルと此の堺の高須の里に地獄太夫といふ全盛がある、
夫へ小西屋善兵衛といふ藥種屋の伴善太郎といふのが大
層打込んで、度々高須へ來て金に明して靡かせやうとし
たが、どうしても此の地獄太夫が打解けない、夫が病ひ
の原因でフラ〜と病み付き、モウ此の頃では枕も上ら

ぬ始末、新父の善兵衛が一休様とは懇意にして居るから、
 焼野の雉子夜の鶴、子を思はぬ親とてはないから、どう
 か一休様に諭して貰ひたいと禪つた、ソコで禪師が小西
 屋へ来て善太郎の枕邊へ座り、二「コレ善太郎、其方は心
 得違ひの奴だ、是を見て能く考がへろ」とサラ〜と書
 いた

兩眼の明らかなるを持ちながら

女にあへば目なしとぞなる、

女房の辨才天と美くしい

美人といふも皮のことなり

子寶なり〜

と書いた、二是が汝に分れば病びは全快する、どうだ合
 點が行つたか」流石は大家の伴、教育も充分に届いて居
 るから、今禪師がお書きなすつたのを見ると成程と發明
 をして忽ち病ひ全快をしたといふことでございます。
 茲に地獄太夫といふ、女ながらも悟道徹底をした變り者、
 能く蓑家の店に女達磨の繪がございますが、那は此の女
 を書いたのだといふことでございます、禪師の名前を聞
 いて、どうか一度お目に掛つて禪家の悟りを伺がひたい
 と或一日定齋庵へ参りました、禪師にお目通りを願ふと

是へ通せ、一通りの挨拶が済んで地獄が、地禪師様へ差
上げます」と短冊を一枚出した、御覽になると

山居せば深山の奥に住むぞかし

こゝは浮世のさかひ近きに

禪師カラ〜と笑つて

一休が身をば身ほどに思はねば

街も山家も同じ住家よ

と遊ばした、二時にお前は、大分美くしいが、何といふ名
前であつた」お尋ねになると、地手前は高須の里の地獄
太夫でございます、ニア、さうか……聞きしより見て恐

ろしき地獄かな」と高らかに仰しやつた、時に地獄が、
地活き来る人も落ちざらめやは」といつて其日は立歸つ
た、ソコで禪師が、彼奴中々面白い奴、未だ年も往かん
女ながら餘程答へた奴、よし〜彼奴の處へ参つて一ツ
器量を試して見やうと、茲で兩三日経つて、たつた一人
草庵を立出でましてプラリとやつてお出でなすつたのが、
高須の里、玉菜と申しまする轡屋でございます、二ハイ
今日は、御免よ、男入つしやいまし」若い者が見ると麻
の衣に藁草履を穿いて乞食坊主のやうな者が、ビヨロビ
ヨロ入つて来た、女郎屋の若者は一休様とは知らないか

ら、男何だお前は、二「地獄は居るか、男ナニ、二「地獄は居るか、男何だと、大風なことをいふな、此の廊で一といはれる地獄太夫手前達のやうな乞食坊主に尋ねられる人ぢやアねへ、狂人だな、サツサと歸れ、愚圖、すると爲めにならねへぞ、二「何だ、不埒なことを貴様達はいふな、彼は如何に全盛でも賣物買物、金さへ出したら源平藤橘四姓の人に枕を交す、客の選好みをするといふ事はない、今日は地獄に會つて一ぱい馳走にならうと思つて参つたのだ、地獄へさういへ、男此の乞食坊主色狂人に違ひない、太夫を何處かで見やアがつて餘程たじ

いて居る、邪魔だからサツサと出て行け、マゴくして居ると痛え思ひをするぞ、二「此奴以ての外のことをいふ奴だ、左様な不届をいへば此方で其分に捨て置かん、一骨を當てるからさう思へ」如意を取直してポカリと殴つた男アツ痛え、此ン畜生殴つたな、二「アハ、怒つたな、中々其の顔は宜い形だ、モウ些と口を尖らせろ、男ナニ此の糞坊主頭から水を打掛けるぞ」ゴタ、やつて居る餘り騒がしいので地獄太夫が何事ならんと表を見ると一休様が如意を持つて立つてお在なさる、驚ろいて其處へ駆出して、地、コレお前方はそんな亂暴なことをしては

らない、私しに遇ひたいといつてお出でなすつたお方、
假令どういふお方にしろ、私に一言通さなまいふこと
はない打つの叩くのは何だ、身に召した三衣の手前も
憚からず以ての外のことだ、お詫をして此方へお通し申
せ」鶴の一聲、若い者は押黙つて地獄太夫の部屋へ案内
をした、禪師のお姿を見ると地獄太夫が夫へ立出で、
地是は「休能う入つしやいました、サアどうぞ此方へ
お通りを」と己れが部屋へ案内をした、サア驚ろいたの
は若い者定齋庵の禪師様、ア、扱は那れが話しに聞いた
有名の一休様か、どうも飛んだ疎勿をしたと今更急に恐

れ入つて了つた、禪師が座敷へ通つて見ると、傍らの衣
桁に地獄の裨襦が掛けてございます、裾が野晒、上へ現
はしたのが地獄の形相、常に之を着て歩くから人地獄太
夫といふ、其側に椅子或は拂子、種々な佛具が並べてご
ざいまして花魁の部屋とは思はれません、地どうぞ今日
は御緩りとお遊びを願ひます、只今御酒を」ソコで精進
料理に酒が出る、二いや地獄、私は精進料理は往けない、
子供の時に鯉へ引導を渡して食つたが、未だに其味が忘
れられんどうか鯉の生作りを馳走して呉れ」大變なこと
をいふ坊さん、やがて鯉の料理が来る、禪師が大盃を上

げ、地獄太夫が酌をして茲で充分御酒を召上つた、地獄太夫は大きに喜こびまして、之から禪師へいろく伺がふと、響きの物に應ずる如く、禪師がお諭しになる、地獄太夫が一々之を會得をした、尤とも此の邊はお話しをする大分長くなりまするし殊に六ヶ敷いお話しでござい、今年十九才、年端の往かん地獄ではあるが、一を聞いて十を悟り、十を聞いて百を知る、實に天晴れなも、のだと御賞美になり、之からミツシリ御教化をなすつたから地獄太夫は忽ちにして悟道徹底をした、之が縁とな

つて、屢々禪師は地獄の許へお出で遊ばして種々とお話しをなさる、時に地獄が、地どうか私が相果てました時は引導を願ひたう存じます二よし」と御承知なさるソコで其後暇さへあれば地獄は椅子へ倚つて座禪觀法、又暇を見て御草庵へ訪ね、禪師のお話しを聞くのを何よりの樂しみとして居りました、然る處年を重ね、不圖した風邪が病ひの原因、枕が上らくなつてモウ頼み少なになりました時に禪師を枕邊へ招待して引導を願ふ、約束でござい、喜こんで冥目をした、ソコで死體は玉菜の長者と残り、喜こんで冥目をした、ソコで死體は玉菜の長者と

いふのが地獄の生前に大層金を儲けて居りますから、立派やかな葬式を營なまふといふ、禪師が聞いて、二イヤ、夫では當人の爲めになるまいから、是は早々死骸を捨て了つたが宜い」と遂に地獄の死骸は經帷子、桶に入れて差担ひで担ぎ出して、鳥野邊へ持つて参り、棺桶から引出して草原へ死骸を捨てお歸りになつた、何ぼ大徳寺の禪師様でも餘まり惨いなさり方だといつたが、其後地獄の居間を片付けると、一首の辭世が出た

我死なば焼くな埋むな野に捨てよ
 瘦せたる犬の腹を肥さむ

實に悟つたもので、之を知つて死骸を捨てると仰しやつた一休様は剛い者だと感心をした、七日の忌日も過ぎ、七々四十九日の間雨に曝され風に吹かれ、スツカリ皮肉が腐れて骨ばかり残つて居る、處が鎖で繋いだやうに手も足も満足に骨が繋がつて居た、之が一つの不思議、禪師が四十九日にお出でになつて、ニア、地獄は悟つたものだ、此の醜ひ姿を見て色に迷ふ者を戒しめやうといふ彼の心、頗る佛法の奥儀を悟つたもの、如何にも感服した、是は凡人ではない、手も足も骨がチャンと鎖で繋いだやうになつて居る、之を鎖骨といふ、女ながら天

晴れな者である」とそこで骨を奇麗に洗ひ清め元の棺桶へ入れ、之を持歸つて改めまして、立派やかなる葬式を営みました、されば今以て泉州堺に女郎塚といつて古蹟を残しましたのは此事でございます。

第三十一席 禪師入滅

扱文明の十三年十一月二十三日、禪師御年八十八才で御遷化、山城國綴喜郡新新村酬恩院でお逝去になりました

我死ねど何處へも行かぬ此處に居る

尋ねはするな物は言はぬぞ

是が御辭世で、又一説には

藤々而三十年

淡々而三十年

藤々淡々六十年

末期希冀捧梵天

といふ辭世をなすつたといふお話しもございます、伏見街道から奈良の方へ三里ばかり行つた處に今以ちまして、禪師の古蹟がございます、禪師御存生中に髮の毛をソツクリ植えました、其植髮の御尊像といふお木像が今以て歴然と歴つて居るさうでございます、扱永らく讀續きました一休大禪師のお話し、是にて結局といたします。

頓智 一休の頓智終

明治四十年十月十二日印刷
明治四十年十月廿八日發行



編輯者 柴田 薰

東京市日本橋區松島町二十九番地

發行者 內田 梅造

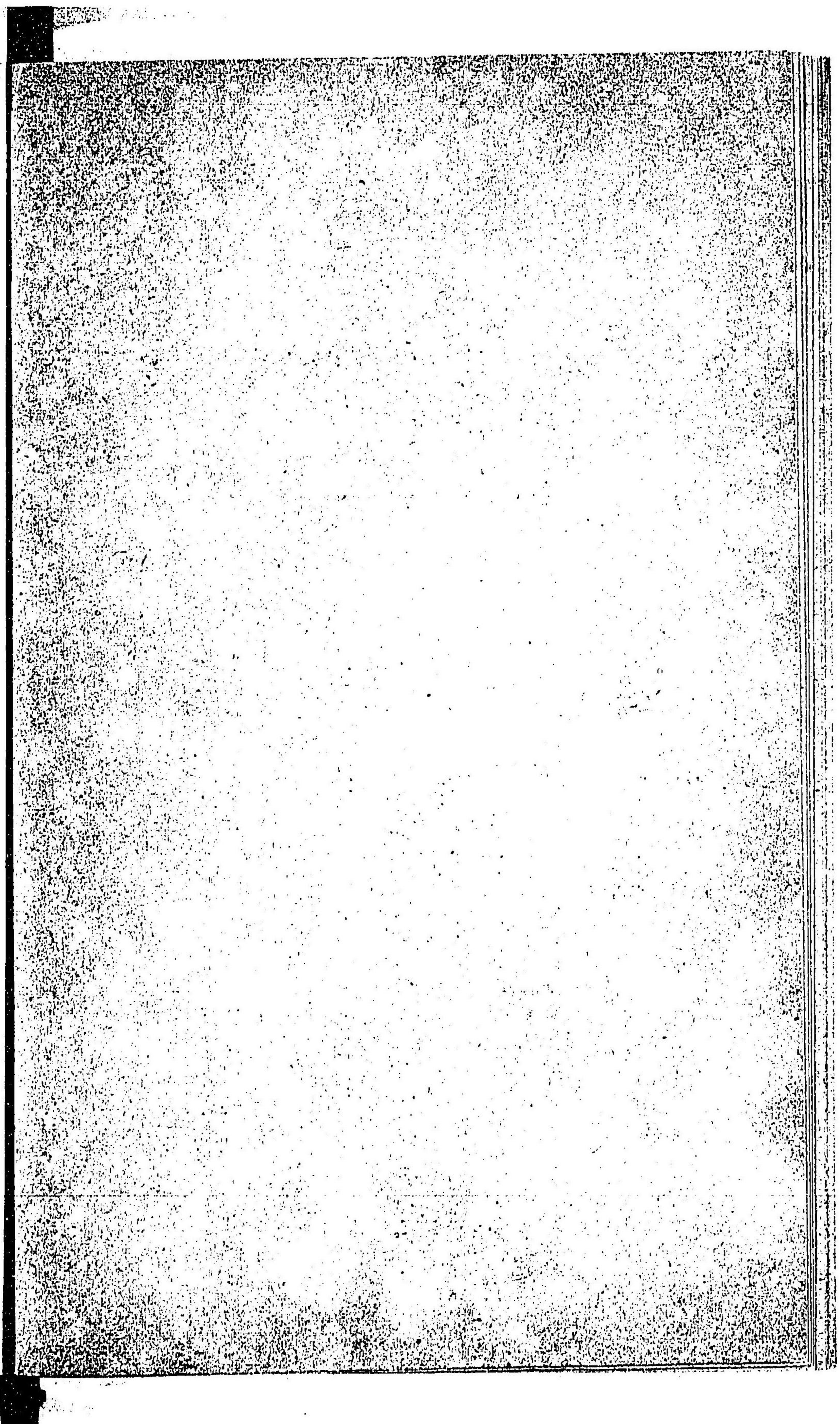
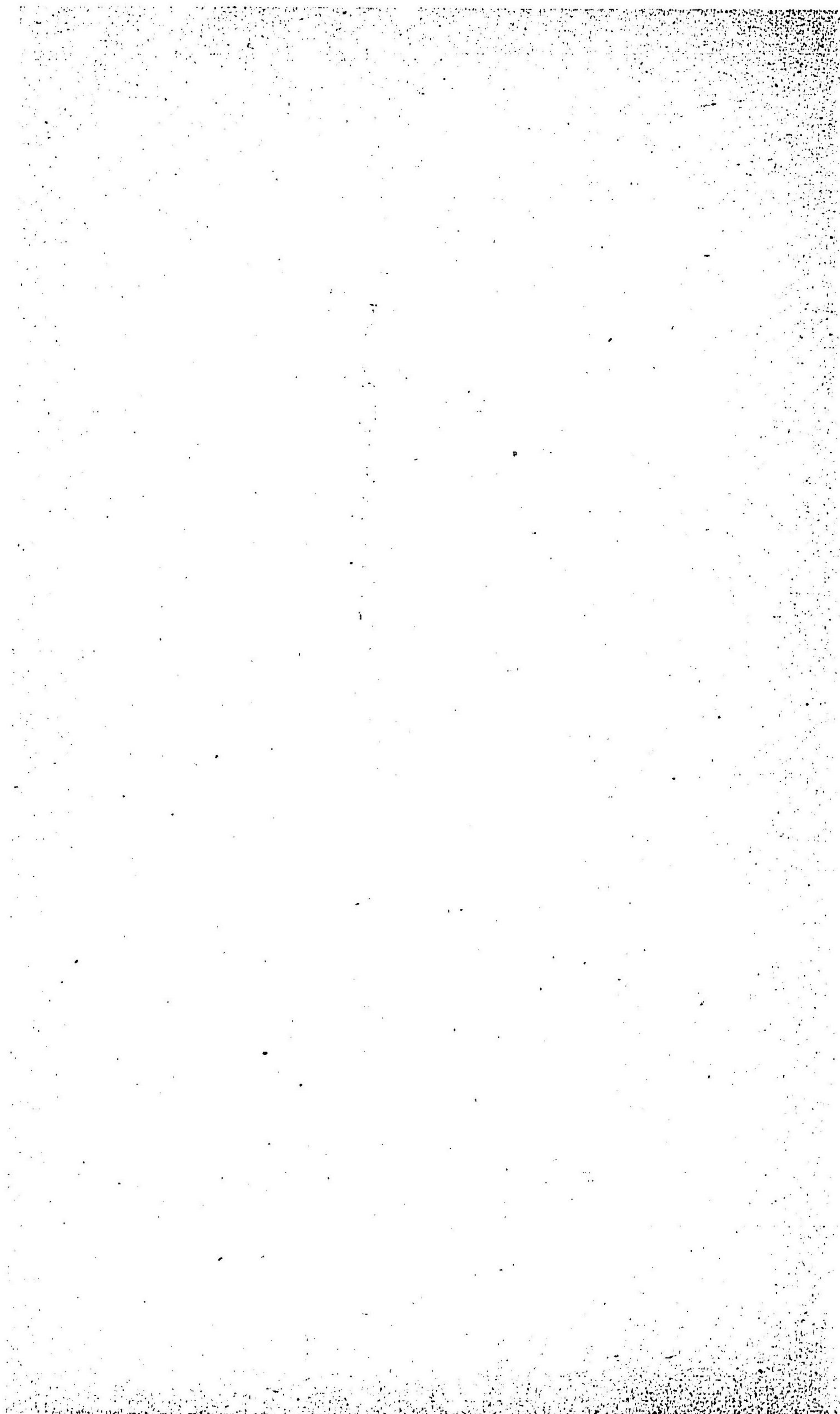
東京市日本橋區蠣殼町三丁目一番地

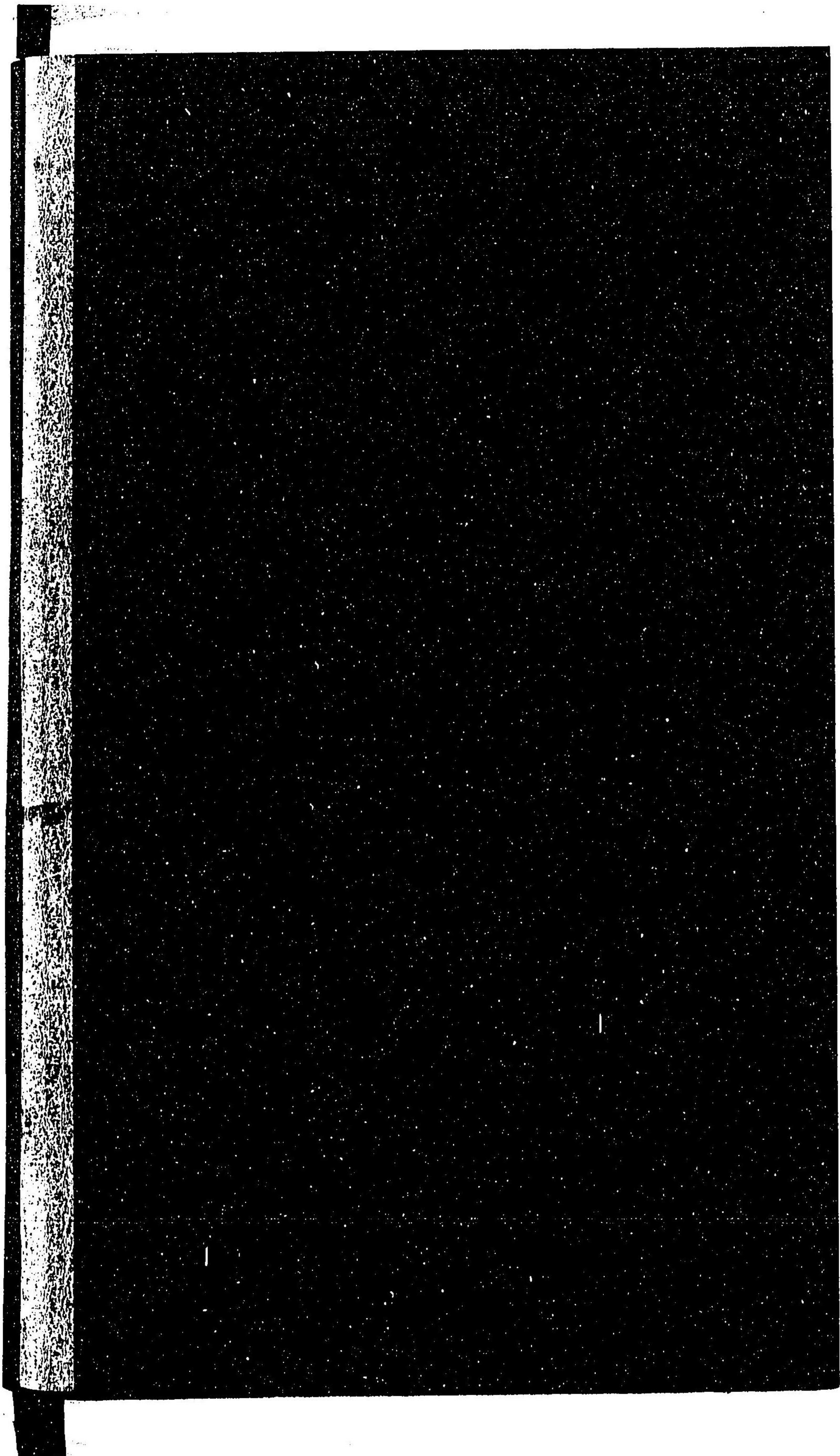
發行者 中島 萬吉

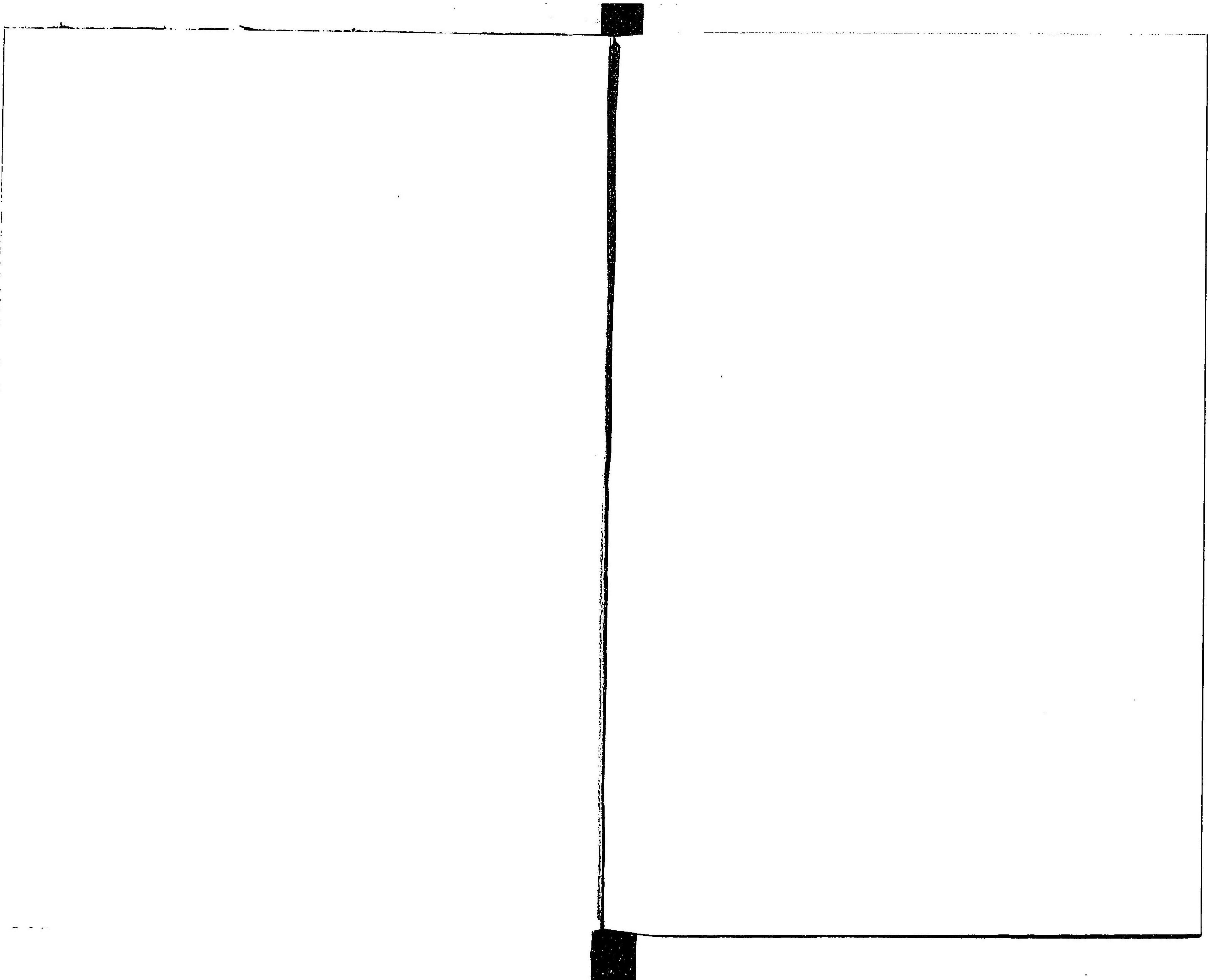
東京市神田區表神保町二番地

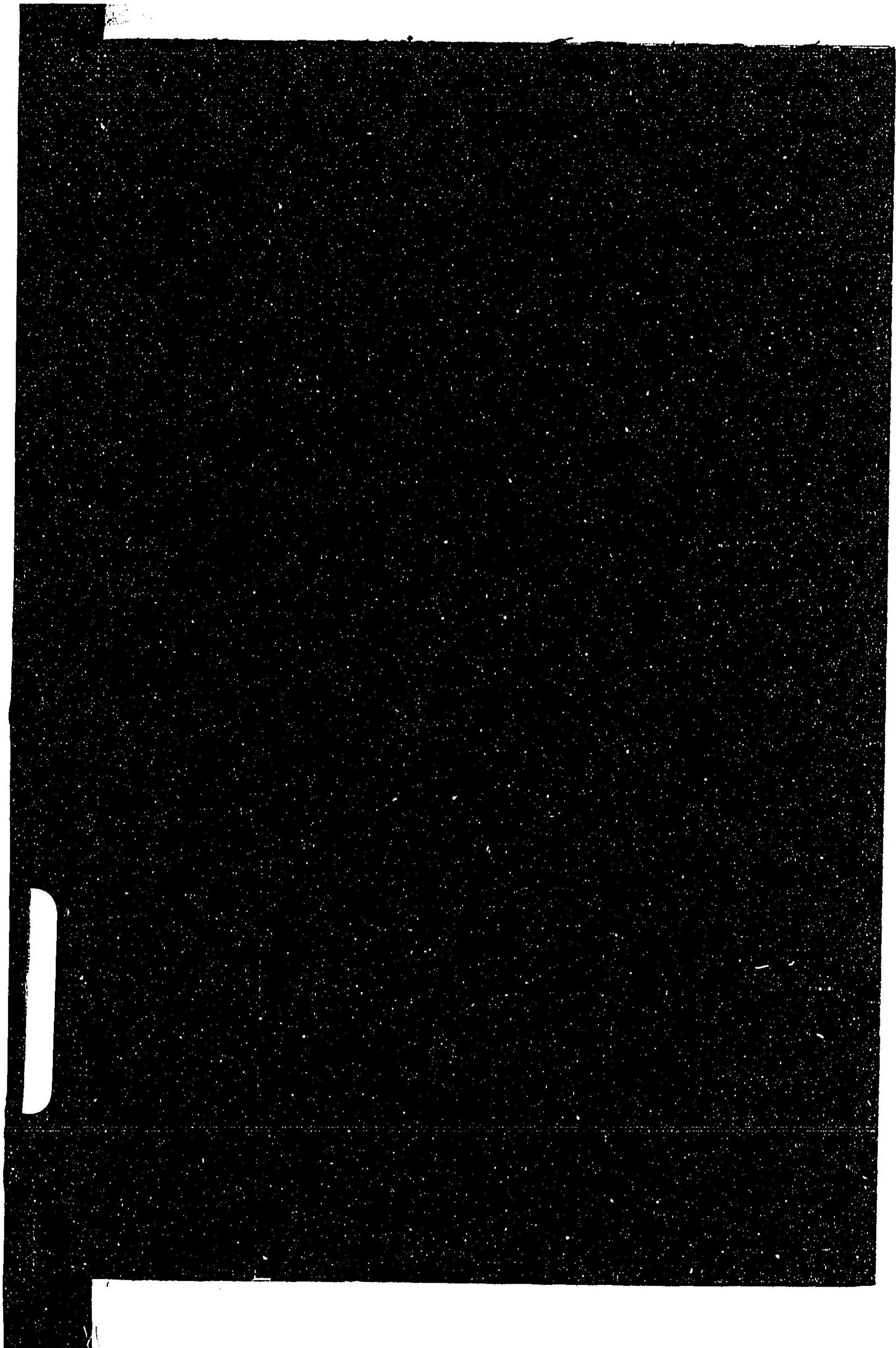
印刷者 三島 宇一郎

發行所 自省堂 自成堂









持 63

521

205029-000-2

特63-521

一休の頓智

柴田 薫 / 講演

M40

EDV-0021



